海外建設協会
プロジェクト便り
◆ブルネイ

ブルネイは東南アジアのボルネオ島（カリマンタン島）に位置する。南シナ海に面し、内陸部はマレーシアと国境を接する。面積は三重県とほぼ同じ5765平方キロメートル。人口は44万人（2021年）ながらエネルギー資源が豊富な立憲君主制の国家だ。英国統治から独立した1984年には、日本と国交を樹立しハサナル・ボルキア国王（第29代スルタン）が来日。最近では、23年12月に日本で開かれた日本・ASEAN（東南アジア諸国連合）特別首脳会議で訪日し、皇居で天皇陛下の歓待を受けるなど日本の皇室とも長年にわたる交流がある。

石油・ガス採掘や液化天然ガス（LNG）製造が主要産業であり、石油・ガス部門が国内総生産（GDP）の50％以上を占める。LNGは産出量の約70％を日本へ輸出しており、エネルギー資源の安定供給を担う重要国となる。23年10月に上川陽子外相が就任直後にブルネイを訪問するなど、両国間で活発な要人の往来があり、良好な関係を築いている国の一つだ。

## 中央銀行ビル（旧名・金融庁ビル）建設工事

# 現地業者の協力得て困難打開

飛島建設

飛島建設はブルネイ国家が独立する前の1979年にこの地に事務所を構え、継続的に公共事業や民間プロジェクトに参画してきた。19年2月にブルネイ金融庁（The Autoriti Monetari Brunei Darussalam）の本庁舎ビル建設工事を受注し、同7月に着工した。

中央銀行本庁舎の外観

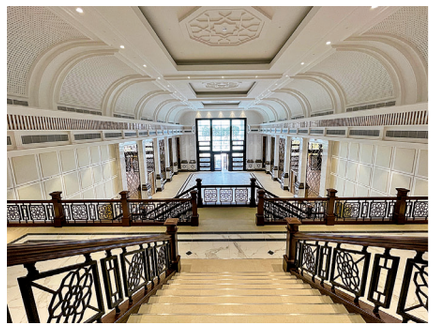
同国での金融庁は大蔵省と共に中央銀行の役割を担う。本庁舎のデザインを見ると、イスラム建築のドームを模した多角形ドームを屋根3カ所に配置し、外壁には白い砂岩を用いている。吸水率が高い砂岩は内壁に用いるのが一般的。本庁舎では石材メーカーと検討して浸漬・乾燥による吸水防止工法なども取り入れ、外壁に適用した。

躯体構造にはポストテンション（PT）梁、PTスラブを多用し、RC造ながら大空間を実現。施工中の躯体補強からPT梁・PTスラブを含む施工計画、外装・仕上げ施工計画ではより綿密な調整を要し、現地スタッフとの情報共有を徹底して施工管理を進めた。

しかし、着工から間もない19年末に発生したコロナ禍は、瞬く間にブルネイにも波及。海上輸送による食料品などの輸入は継続されたものの、20年3月には同国を囲むマレーシアとの国境が封鎖されて建設資材の輸入が停止された。

ブルネイの建設工事では仕上げ工事の材料はほぼ輸入に頼っているため影響は甚大。調達先がスペインだった外壁用の石材は、現地のロックダウンにより石材加工と海上輸送に深刻な影響を及ぼした。

## 綿密な計画調整と情報共有


中央銀行本庁舎のアトリウム

工事継続は極めて困難な事態に直面したが、多くの国でそうだったようにコロナ禍による契約上の取り扱いや発注機関の対処が不明確な状況では工事を進める必要があった。

人員の確保にも苦労した。ブルネイでは建設工事に関わる技術者や作業員がほぼ100％外国人労働者であり、罹患（りかん）した人員が欠落する一方、新規入国者はゼロという状態が続いた。現場では政府指導により床面積当たりの作業員数制限が課せられ、これに対応する必要もあった。

さらに21年6月の機構改編により、工事の契約相手が金融庁からブルネイ中央銀行（Bruunei Darussalam Central Bank）へ移行。契約更改のため工事が中断されるという事態も重なった。

工程のほぼ全期間でコロナ禍の影響を受けたほか、ブルネイ王室の要望への対応、二転三転する所管官庁からの指示なども加わる中、コンサルタント会社を含めて関係各所へ粘り強く条件交渉を重ねた。その結果、全面的な工程見直しについて発注者の理解を得ることができた。

コロナ禍による各種規制が解除された22年5月からは、現地業者の多大な協力を得て工事を推進。23年1月に施設の部分使用を開始し、同3月には無事竣工し発注者に引き渡した。これまで経験したことのない幾多の困難を乗り越えられたのも、工事に関わった職員や作業員のおかげだ。その大半がブルネイ国外の外国人。彼らには感謝とともに、今回の工事経験を生かして自国でのさらなる活躍を願っている。

飛島建設はブルネイで主要な建設工事を数多く完成させ、インフラ整備、経済活動に貢献してきた。今後も建設工事を通じブルネイの発展と技術移転を後押ししていく。

（国際支店ブルネイ事務所・鈴木勝博）